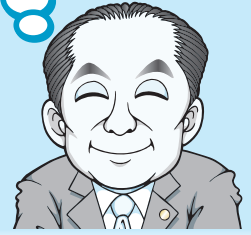


# 町長の一言



## 今年の干支

今年の干支は「亥」です。昨年は猪の出没が、特に多かったように思われ農作物にも多くの被害が出ました。

私の周辺の猪による被害を歳時記的に追ってみると、春4月の筍の季節には、まだ土中の若筍を掘り食べるので裏山の竹林に防護柵を作って防いでいます。そして、田植え前にせっかく作った田の畦をミミズ取りで破壊、トウモロコシの新芽を食いちぎり、盛夏の頃はやや遠のいたかと思っていると、秋口の蕎麦の実る頃には、人に貸している屋根畑の蕎麦が全滅近くなりそうになり、慌てて耕作者に連絡する始末でした。そうこうしているうちに、甘藷（さつまいも）畑に乗り

込んできて、昨秋は、横着して電気柵を設置しなかったので、猪へたくさんご馳走してしまいました。猟期が近づき、ブルーベリーの根本を保護している藁の下の虫を探している頃ようやく冬になりました。猪にも可哀相なところもあります。開発が進んで住む範囲が狭められたり、昨年の入梅期の長雨で、粟をはじめとする木の実が不作だった事もあり、人家近くへ出てきたのかなと思っています。

猪突猛進もいいですが、今年は少し山奥で控え目にしていて欲しいと思っております。正月は安全な場所です寝正月を決め込んでいるかも知れませんが。

## 文芸しるごと

### 俳句



- 山崎 正行 崩れ築水のきまぐれ受けとめし
- 今 瀬 多代美 少女期と同じバス停黄落す
- 竹内 幸子 霜柱踏みしめ音の楽しかり
- 和田 範子 桜海老天日に干され冬の富士
- 飯村 昭子 山眠り獣も眠り静けさよ
- いそべ きよ 箸置きは川の石なりしぐれ宿
- 鯉 淵 寿美恵 直立に水仙を活け香りけり
- 森 静江 草筵日にあたたまる冬の蝶
- 仲 田 まちゑ 暮早く一番星は山の上
- 阿久津 あい子 波の花吹き飛ぶ冬の日本海
- 高橋 芦江 山茶花や児筆脈やかに下校せり
- 飯村 愛子 冬霧の墨絵の中へ登校す
- 田所 厚子 一本の裸木父祖の大銀杏
- 瀬谷 博子 流鏑馬や騎乗の武者の菊祭り
- 岩下 金司 一振りの木刀の冴え年新
- 田口 勝元 「美作」や田畑にうつすら冬の霧
- 仲 田 こう 柿見れば故郷忍柿の市
- 市川 義子

### 短歌



- み仏の御加護のありて雨も止み山又山の名湯に着く
- 宮本 ふみ江 柿の葉の地の面いろどり散り敷けば宝のごとく拾ふ幾ひら
- 所 美恵子 ふる里の香りわが娘に送らんと
- 「紫蘇の実」摘めば指黒く染む
- 青柳 京子 診察を待つ間は長し看護婦の呼び出しを待つ今か今かと
- 山形 式 妙 赤き蕊摘まれしも大き白百合は毅然たり人間のエゴ問ふごとく
- 渡 辺 千紗子 西行法師も義公烈公も短歌に費でしに想ひを馳せる袋田の滝
- 秋山 愛子 青春の日の筆あども継せにたる戦没画学生の絵無言館に観る
- 大森 久子 安部総理とハンカチ王子にイナバウアー案山子コンクールに勢揃いする
- 高堀 よしの 萩の花しだれたる坂を登り来て古里の墓地にたらちねを訪ふ
- 佐川 あや このぐらいい他所に上げると良きかなと匂ふ紫蘇の実両手に掬う
- 杉山 みちこ しらしらと音なき雨につゆ含みしつとり咲きしきんかの花
- 岩下 通子 紅葉が色一入にかがやいて自然の恵み神業なりや
- 富田 欽子 目をやれば枯葉舞い散る庭先に冬將軍の到来を待つ
- 岩下 美知野 遠山は夕焼杉に染まり来て松の梢をカラス群れゆく
- 阿良山 ウメノ

### 川柳



- メジャー行き松坂大輔夢果たす来季の活躍期待大なり
- 山口 栄 亡き夫の植えにし柚子の実の十八年振りたわわに実る
- 薄井 ひろ 裸木の「かりん」はごろりと実をつけて強風にゆすらるるもめげずに残る
- 枝 不美 落ち込みを遣らはむとして「一、二、三、四」リズムとりつつ扇へとたつ
- 片見 和枝 溪谷の名残りの紅葉はしぶきに濡れ残り火のごとく彩り光れり
- 川上 千代子 夕風の知覧の海は還り来ぬ若人にきらきらと灯ともせり
- 島 愛子 生誕二百年の止幾を忍びつつ茅ぶきの家を吹きぬく秋の風中にゐる
- 多田 志保子 病む夫の原因わからぬまひと月すぎてようやくと説明のまひ
- 坪井 きよ子 四人目の孫は男児にて抱きやれば腕にずしりと重き伝わり来
- 萩谷 登喜子 為すなくて過ぎつつ日めくりのカレンダー残り少なし年の瀬近し
- 和知 美智子 秋晴るる大杉のもとに仰ぐ朝の那智の大滝心洗わる
- 富田 佐智子
- 中島 芳春 国技までめだつ関取国際化
- 山本 隆 定年後妻にも負けた年賀状
- 山本 隆 二枚舌巧みに使う赤絨毯
- 富田 多蔵 どうしても出来ぬ問題夢が解く
- 青木 新三郎